



「正論」のすすめ

東京工業大学
原子炉工学研究所 藤家 洋一

原子力界は今転換期を迎えている。21世紀に向けて大きく飛躍し、総合科学技術として人類社会を支えるものとなりうるか、あるいは世界的なモラトリアムが一時的なものでなく定着し、わずかに部分的にエネルギー供給をしながら終結に向かって行くかである。

前者を志向するにあたって要求されるのは着実さに加えて夢と可能性への挑戦であり、熱気をはらんだ「正論」の展開であろう。

従来、原子力界ではあまり「正論」や「書生論」でその将来を議論したことはなく、着実さを重視した現実論が支配的だったように思える。

たしかに、開発をすすめ実用化を効率的に行うには、専門領域を分化し、各領域に人材を割り振って専門家を育成することが重要で、事実我が国の原子力は実績主義に立ち地道に着実に開発を遂行し、見事に日本型軽水炉技術の実用化に成功したが、同時に分野は細分化され、全体を見通した議論は必ずしも多くない。

一方、社会の人々は軽水炉の実用化で原子力開発は完成し、もはや先端領域ではなく、既成の技術領域に入ったものと考えているように思われる。その先に新しい発展領域のあることを予見せず、原子力技術の社会性のある部分、特に燃料サイクル、安全性等、国際政治、環境保全の観点からの問題を好んで議論しようとしているかに見える。このような世の中の風潮が原子力の活気を阻害しているのだろうか。

国際社会では日本が今、最も研究開発の環境に恵まれているように思える。しかし、日本からどんなアイデアが、どんなテーマが提示されるかについての期待が果たしてあるのか。これまでの開発の継続や、核不拡散についての透明性や国際協力、あるいは安全技術を通しての国際貢献などはあっても、新しい領域への挑戦について積極的取組みがないと、世界は日本を原子力先進国として認めないであろう。

国際社会では、意外に「正論」が通じるものである。日本の原子力に対する姿勢も「正論」で話すことが今後先進国として生きていく上で重要だろう。資金力だけが評価されることのないようにしたいものである。

原子力界が日本型原子力発電の早期実用化を求め、産・官・学が協同してこれにあたった時代は終了し、新しい時代、すなわち総合科学技術としての原子力文明の創造に向けての役割分担を考える時期にある。原子力は未だわずかにエネルギーの利用の一部に成功しているに過ぎず、石油代替としてのエネルギー開発以外に核エネルギーの利用形態を導き出していない。原子力はまだ総合科学技術として成長すべき多くの夢と可能性を秘めている。

夢と可能性に対する展開は若者をひきつけることになるだろう。原子力界に活気をもたらすことにもなるだろう。そして、ひいてはそれが社会の理解を深めることにもなるだろう。

本学会は原子力のアカデミズムの中心で、夢と可能性の挑戦へ向けた「正論」を喚起し、原子力に活気をもたらすべく学会活動を奨励することが望まれる。また、研究開発の先進部分を担うものとして大学や研究所がある。このアカデミックな部分の役割が重要であろう。原子力の中での理想的なエネルギー開発を見出していく必要がある。我々は未だ究極的な原子炉が何であるかを見出していない。

大学は今、いわゆる「リストラ」の真只中にある。原子力も新しい夢の創造のためと可能性への挑戦のため、名称変更や組織改革によって気分を転換して新しい領域に挑戦することも必要であろう。

私たちの研究所は後者を選択した。原子力開発の必要性和重要性を再確認して3年が過ぎた。この決断が妥当であったと確信しながらもこれから成果が問われることになる。(1993年 8月6日稿)

藤家 洋一 先生

東京工業大学 教授
原子炉工学研究所 所長
原子力委員

略歴

- 1935年 長崎県生まれ
- 1958年 東京大学理学部物理学科卒業
- 1960年 東京大学大学院数物系研究科物理学専門課程修士課程修了
- 1963年 東京大学大学院数物系研究科電気工学専門課程博士課程修了
- 1968年 大阪大学工学部原子力工学科助教授
- 1980年 名古屋大学プラズマ研究所教授
- 1986年 東京工業大学原子炉工学研究所教授
- 1989年 東京工業大学原子炉工学研究所所長 現在に至る
- 1995年 原子力委員（兼務）現在に至る

主な著書

- 原子力－核エネルギーの解放とその利用－（関西原子力懇談会、1982年）
- 原子力発電－そのしくみと安全性－（社会経済国民会議）
- 21世紀社会と原子力文明－宇宙エネルギーをつくる－（日本電気協会、1992年）
- 原子力－総合科学技術への道（日本電気協会、1995年）

先生のご活躍は、単に産・官・学に留まらず、むしろそのような枠におさまりきらないところにその本領が発揮されてきたのではないかと思います。大学院修了以来のそのようなご活躍については、それぞれの時代それぞれの局面で、ご指導をうけられた方、一緒に研究・活動をともにしてこられた方々に語って頂きました。詳しくは第三部をご一読願います。